

警察の予備役的に事件時に活動する教育プログラムも提供している。NBC テロの可能性の除外をどうしていたかというと、あらゆる簡易検知器で剤が検出されず、しかも臨床症状がなかったので、除外できた。検知器にはいろいろあるが、人間は最も敏感な検知器のひとつであり、いわばカナリアになりうる。こういった意味もあって、感染症に対する標準予防策も徹底しながら、被害者の様態は続けて経過観察（熱が出ないか、他の感染症状が出ないかなど）された。

London Ambulance Service の Smith 氏の講演

私は、ロンドンの救急隊を統括している立場にある。当初、爆発は別々の事故だと思われていたが、24 分かかって全ての事故がひとつの事件に繋がった。困難であった問題点は、電源や照明がなかったこと、ほこり、現場へのアクセスの悪さ、捜査とのかねあい、通信の混乱であった。吹き飛ばされたロンドンバスは前述のように BMA のすぐ前で爆発したが、BMA 本部にいた医師や近隣の病院のスタッフがかけつけた。全体を総括すれば、いわゆる MIMMS における Basic Command Structure が良く機能した。MIMMS でいうところの Golden Strategic Team がしたことはまず何が起きたかの把握、指揮所の策定 会議システムの確立、他の機関との連携、病院との連絡、119 番通報増加への対策であった。インシデントコントロールコマンダーも指名され、通常の救急車要請への出動を厳しく制限し、事故対応に専念した。MIMMS でいうところの Golden Strategic Team の会議は 30-45 分毎開催し、作戦は常に見直し、情報システムの確立を目指した。近隣の市町村の救急車の応援もかけつけ、救急車の連携は非常にとれていた。その間にも、ロジ、スタッフの精神的安全管理、CBRNE に対する警戒、情報共有、被害者数の把握、続発しておこる事件への備えも行なっていた。救助者のカウンセリングも熱心に行われ、LINC: listening informal non-judgemental confidential Resilience : 良く耳を傾け、気楽に、無批判に受け入れ、秘密を守り、元気をつけるという原則が守られた。マスコミ対応としては、的を絞った情報提供に重点を置いた。VIP 訪問への対応にも追われた。自分たちで細かく時系列できっちり記録をとることが必要であった。デブリーフィングは徹底的に行なった。その他の問題としては、Tavistock Square (BMA 本部前) のバス爆破現場が地上で非常に分かり易く可視的であり、より被害が直接見えにくかった地下鉄構内の事件現場と比較して救助者が集まりすぎた反省もあった。

ロンドン外傷センターの精神科医、Turner 医師

EBM にもとづいた精神的援助を解説。広い意味では、テロ事件では、デブリー

フィングで自然軽快が期待できる程度の軽症な精神症状から、急性ストレス障害、PTSD（トラベルフォビア）、抑鬱、精神病急性増悪まである。メタ解析で PTSD になり易いリスクファクターは外傷の重症度、社会的介助の欠如、その後の生活ストレスがあるもの、が挙げられている。テロでは関係者の約 3 割に PTSD 発症すると言われている。今回 4000 人被災者があるので、ざっと 1120 人は PTSD になる計算である。事件に直接関与したひとと、間接的な人とのでは、アプローチを変えるべきである。社会的を挙げて感情のサポートを行なうべきで、最初の 1 ヶ月は、慎重に観察し、有症状者には、薬剤投与も可である。最初の 1 ヶ月で重症 PTSD の者、3 ヶ月経っても PTSD があるものは、trauma-focused CBT : Cognitive Behaviour Therapy の適応となる。今回のテロでは、既存の社会的な組織立った心のケアのシステムはなかったが、比較的早期にかつ適切に介入できた。今後の課題としては、primary care based practitioner なる専門看護師の教育が考えられる。発症を待つのではなく、より積極的な被害者の精神的スクーリーニングも必要である。米国では National Center for PTSD があって、素晴らしい。英国には残念ながらそのようなセンターが必要である。

英国健康省 Bevan 女史の総括

広範囲熱傷の患者が多発したので、植皮用の皮膚が足りなくなった。連携コーディネーションセンターが必要である。病院のリーダーシップをどうマネージしてゆくかも重要である。

Royal London Hospital の Davis 医師、London University College Hospital の Boden 看護師の両名は残念ながら欠席であった。

文責 順天堂大学救急災害医学研究室 奥村徹

奥村報告 資料③

SUMMARY OF THE EXERCISE

PURPOSE:

To check how the information concerning chemical terrorism is conveyed internationally via E-mail

METHOD:

Date: 14th Feb. 2006

Time: 8 AM -10 AM (Japan mean time: JMT)

Scenario: Chemical attack for Fujiyama international airport (fictitious) in Japan

Initially JAPAN contacts with the 24-hours-contact-point of Canada via phone and E-mail at 8 AM. The 24-hours-contact-point of Canada sends the information to the 24-hours-contact-points of each country via E-mail. The 24-hours-contact-points of each country tell information to the Chemical WG specialists of each country via E-mail. From the 2nd to the 5th information (10AM) JAPAN sends E-mails to the 24-hours-contact-point of Canada. And the 24-hours-contact-point of Canada sends E-mails to the 24-hours-contact-points of each country. The 24-hours-contact-points of each country send E-mails to the Chemical WG specialists of each country. JAPAN sends E-mail to the Chemical WG specialists of each country. Time course check card should be sent back to Japan for later analysis.

Details of the Report #1 to #5 descriptions, see Attachment #1.

RESULT: See Attachment #2

- 1) 4 countries did not show response.
- 2) Therefore the response rate was 50%: 4 / 8 (G7+M+IPCS/WHO-JAPAN).
- 3) There were no responses in the cascade from Canada HQ.

DISCUSSION:

Basically the chemical terrorism is different from the bioterrorism in the meaning that most damage is settled within first three hours after a incident happened. International society cannot contribute within these first three hours . Rather this is a domestic problem. However, it is very likely that the same criminal group performs a crime frequent occurrence at the same time when international terrorism attacks the world. There is the first significance of international information exchange about the chemical terrorism here. International cooperation is

indispensable to correspondence to new chemical agents. There is not the guarantee that of a typical, textbook-descriptive, and classic chemical weapon are used for in future. In this exercise we checked how the information was conveyed. Information concerning attacks will be reported by mass communication. However, it is doubt whether mass communication tells the scientific and precise fact. Significance of a public network is to convey a right objective fact more scientifically. In this exercise, response rate was not high, therefore significance of such an international cooperation should be recognized among G7+1 countries equally. Unfortunately this E-mail communication exercise showed poor responses, but for sensitive countries, E-mail communication was prompt and effective. E-mail communication is basically passive communication, until checking E-mails in front of the desk we cannot recognize E-mails. We should establish more effective communication pathways all over the G&+1 countries. At now old-fashioned direct phone calls might be one of the alternatives in the real chemical incidents. Face-to-face internet phone also would be the second candidate. Anyway further investigation will be needed for the better communication.

Report #1

*****Exercise *****Exercise*****Exercise*****

This is the Emergency Report.

At about 1140 (JMT) of Feb 14th, 2006, dozens of victims who presented some poisonous gas intoxication symptoms appeared in Fujiyama Central railroad station near the Fujiyama International Airport in Japan. The correspondence begins now in the police and first aid corps, the airport authority. If there is new information, we report it sequentially.

When there is similar situation happening in each country, let us know.

*****Exercise *****Exercise*****Exercise*****

Report #2

*****Exercise *****Exercise*****Exercise*****

This is the Second Report: a followup of the case that happened in Fujiyama Central Station close to Fujiyama International Airport.

It is likely that many injured person occurred suddenly inside of train that faced Fujiyama International Airport. Trains are suspended, and the station is closed down, and the airport is closed, and arrival and departure of a passenger plane is prohibited now.

*****Exercise *****Exercise*****Exercise*****

Report #3

*****Exercise *****Exercise*****Exercise*****

This is the Third Report.

The cause material of the incident is supposed to be nerve agents according to signs and symptoms of victims.

When you reserve this E-mail, please reply.

*****Exercise *****Exercise*****Exercise*****

Report #4

*****Exercise *****Exercise*****Exercise*****

This is the Forth Report.

The cause material of the incident was confirmed to be nerve agents.

There is possibility that some vicious criminals scattered nerve agents.

The number of victims reaches 500. The firefighting organization is preparing decon-units.

When you reserve this E-mail, please reply.

*****Exercise *****Exercise*****Exercise*****

Report #5

*****Exercise *****Exercise*****Exercise*****

This is the Fifth Report.

It was confirmed that the number of victims reaches 800 including dozens
of seriously injured victims.

When you reserve this E-mail, please reply.

This is the final mail of this exercise. Thank you for your cooperation.

*****Exercise *****Exercise*****Exercise*****

奥村報告 資料④

成田国際空港におけるテロ対策合同訓練

京成東成田駅構内
平成18年3月14日(火)

主唱 成田N B C テロリズム対策研究会
主催 千葉県警察本部
成田市消防本部
成田国際空港株式会社

1. 目的 イラク情勢を含め国際テロ情勢は、未だ厳しい状況であり、大規模公共施設である成田国際空港においても一層のテロ対策強化が求められている。

この度、医療、警察、消防機関等により構成された成田N B C テロリズム対策研究会により、成田地区N B C 災害初動対応マニュアルが策定されたことから、同マニュアルに基づきテロ対策訓練を実施し、それぞれの対応や各機関間の連携した体制を確認することを目的とする。

2. 実施日時 平成18年3月14日(火) 10:30~11:10

3. 実施場所 京成東成田駅構内

4. 主唱 成田N B C テロリズム対策研究会(代表世話人 学校法人日本医科大学成田国際空港クリニック所長 牧野 俊郎)

5. 主催 千葉県警察、成田市消防本部、成田国際空港株式会社

6. 参加機関 國土交通省、生物テロに使用される可能性の高い細菌・ウイルス等による感染症の蔓延防止、予防、診断、治療に関する研究班、空港危機管理室、成田空港検疫所、京成電鉄株式会社、東日本旅客鉄道株式会社、千葉大学大学院医学研究院、千葉大学医学部緊急時対応ワーキングシステム、三郡医師会航空機対策協議会、成田赤十字病院、医療法人社団國手会空港クリニック(第1PTB)、日本医科大学成田国際空港クリニック(第2PTB)、日本医科大学付属千葉北総病院、株式会社日本航空インターナショナル、全日本空輸株式会社、空港グランドサービス株式会社、成田国際空港航空会社運営協議会、富里市消防本部、佐倉市八街市酒々井町消防組合消防本部、印西地区消防組合消防本部、株式会社大和サービス、千葉車輛整備株式会社、株式会社セノン、蝶理株式会社、株式会社エス・ティ・ジャパン、成田空港警備株式会社、NAAファイアーアンドセキュリティー株式会社

7. 訓練用電車提供 京成電鉄株式会社

8. 訓練想定 成田空港に向かう電車内に置かれていたビニール袋を乗客が誤って踏んでしまい、中の液体が床に広がってしまった。周辺

にいた乗客等数名が意識を失い、倒れ込んでしまう。他にも不調を訴える乗客が数名発生する。

9. 訓練内容
- (1) 連絡通報
 - (2) 千葉県警察、成田市消防及び空港消防の出動
 - (3) ホット、ウォーム、コールドゾーンの設定
 - (4) 電車乗客の退避及び駅利用者の誘導
 - (5) 液体（化学物質）接触者の救出
 - (6) 空調の停止による汚染区域拡大防止
 - (7) 液体（化学物質）接触者の除染
 - (8) 救護所の設営
 - (9) 医療関係者による救護活動の実施
 - (10) 電車乗客数、症状、医療機関への搬送状況等把握
 - (11) 担架及び救急車による搬送
 - (12) 汚染現場の除染
 - (13) 事故に係る各種警備及び規制
 - (14) その他

10. 模擬搭乗者	重 症	5名 (内2名心肺停止)
中等症	10名	
軽 症	20名	
無 症	65名	
合 計	100名	

11. 訓練現場概況図 別図第1 「地上階訓練区域図」及び別図第2 「コンコース及びホーム訓練区域図」とおり

12. 訓練連絡系統図 別図第3 「訓練初動連絡系統図」とおり

13. その他
- (1) 訓練は、雨天決行とする。ただし、荒天のため中止する場合は、主催三者で協議のうえ当日の09時00分までに決定する。
 - (2) 訓練の通報にあたっては、冒頭に「訓練」という言葉を付し、実際の事故と区別する。
 - (3) 訓練出動にあたっては、前照灯、赤色回転灯を点灯すると共に、サイレンを吹鳴する。
 - (4) 訓練終了後、訓練参加者は、別図第2 「コンコース訓練区域図」の講評、挨拶実施場所に集合する。

訓 練 概 要

- ① 東成田駅行きXYZ社電車が成田駅を出発して間もなく、何者かが放置したビニール袋を乗客が誤って踏んでしまい、中の液体が床に広がってしまった。付近にいた乗客4名が意識を失い、倒れ込んでしまう。また、同じ車両内にいた乗客10名程度が不調を訴える。
- ② 乗客が誤って踏んでしまったビニール袋は、成田駅到着前に放置されたもので、犯人は、成田駅到着と同時に降車し、逃走を図る。
- ③ 放置されたビニール袋を踏んだ乗客は、靴及びズボンに液体が付着する。倒れ込んだ他3人の乗客については、1名のみがズボンに液体が付着したもの、2名には液体の付着がない。
- ④ 事案発生を目撃したXYZ社電車乗務員は、指令室に通報するとともに、乗客の避難誘導等にあたるが、意識を失い、倒れ込んでしまう。また、通報を受けた指令室は、東成田駅へ連絡する。
- ⑤ 千葉県警察、成田市消防及びNAA警備消防センター並びにJR成田空港駅防災センターへ連絡する。
- ⑥ 東成田駅構内のXYZ社員は、駅利用者等の避難誘導にあたる。
- ⑦ 成田市消防は、千葉県警察、成田市消防及びNAA消防到着後は、指示を仰ぎつつ後方支援にあたる。
- ⑧ 千葉県警察及び成田市等消防は、レベルA防護服を着用し、負傷者を救出する。
- ⑨ XYZ社は、空調の停止の措置を取るとともに、医療関係者、千葉県警察、成田市消防及びNAA消防に協力する。
- ⑩ 千葉県警察は、床に漏洩した液体を回収するとともに、当該液体の特定のため、サンプリングを行い、専門部署へ搬出する。
- ⑪ 千葉県警察及び成田市等消防は、液体漏洩電車内の除染を実施する。
- ⑫ 千葉県警察、成田市消防及びNAA消防は、協力して除染施設を設置する。
- ⑬ 千葉県警察、成田市等消防及びNAA消防は、ウォームゾーンから除染施設へ負傷者を搬送する。
- ⑭ 千葉県警察、成田市消防及びNAA消防は、除染施設において、倒れ込んだ乗客等5名の湿式除染作業を実施。また、同乗客等と同じ車両に乗り合わせた乗客は、B1Fコンコースで乾的除染を実施する。
- ⑮ NAA消防は、千葉県警察及び成田市消防と協力して地上階車両乗降場付近に救護所を設置する。
- ⑯ 医療関係者は、負傷者に対する救護活動を実施するとともに、成田市消防と協力して搬送先病院決定等を行う。
- ⑰ 成田市消防は、電車乗客数及び負傷者搬送状況等を把握する。

奥村報告 資料④-2

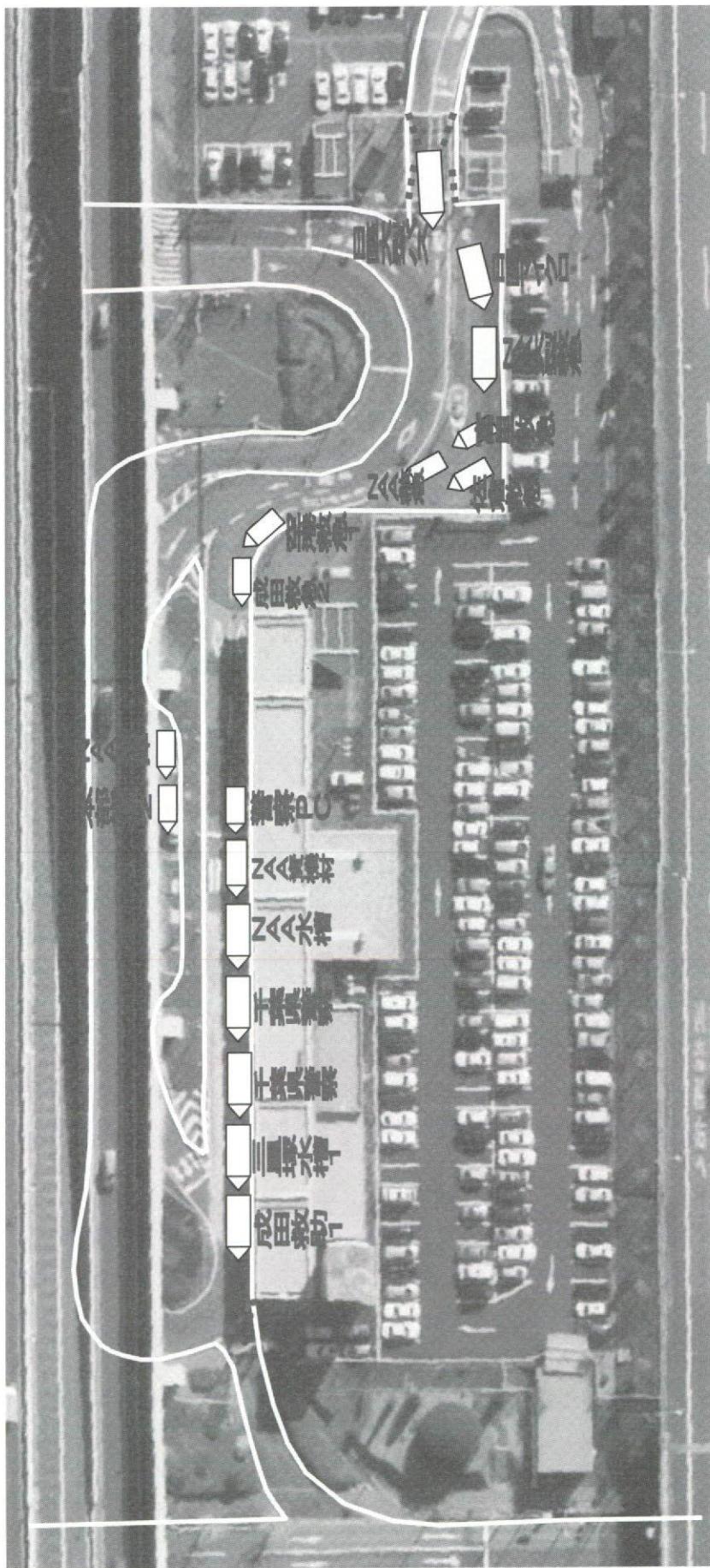
訓 練 経 過

時 刻	内 容
9:40	模擬乗客99名は、成田市役所玄関横広場に集合。成田市消防及び第2PTB空港クリニック等による事前説明実施
10:00	訓練実施に伴う警戒員配置完了
10:00	参加車両A3へ集合
10:31	模擬乗客99名は、京成成田駅3番線ホームから訓練用電車（4両編成）に乗車完了
10:33	訓練用電車は、京成成田駅を出発。模擬乗客A（東成田駅方向前から4両目内）は、床に置かれた不審なビニール袋を誤って踏んでしまう。
10:34	XYZ社電車乗務員は、東成田駅行き電車が成田駅を出発した直後、乗客が不審なビニール袋を踏んでしまい、中の液体が床に漏洩したことにより、倒れ込んだ者や目、鼻、喉の痛み、視力の低下を訴えるものが発生した旨、指令室へ通報するとともに、乗客の避難誘導等にあたるが、その後確認のため倒れ込んだ乗客に近づいたところ、意識を失い、倒れ込んでしまう。
10:35	XYZ社指令室は、東成田駅へ連絡
10:35	東成田駅は、千葉県警察、成田市消防及びNAA警備消防センター並びにJR空港第2ビル駅へ連絡
10:35	連絡を受けた千葉県警察、成田市消防及びNAA消防は、通報内容によりNBC災害対応とともに、関係機関へ通報実施
10:35	成田市消防は、救急隊、NBC災害対応隊を富里市消防本部、佐倉市八街市酒々井町消防組合消防本部及び印西地区消防組合消防本部へ応援出動要請を行う。
10:35	東成田駅XYZ社員は、駅利用者等の避難誘導にあたる。
10:35	東成田駅XYZ社員は、空調を停止すると共に、防火シャッターを降ろす。
10:38	千葉県警察、成田市消防及びNAA消防は気象状況を考慮し、風上側の地上階車両乗降場到着
10:38	NAA警備消防センターは、現場への立ち入り及び交通規制等を実施
10:38	成田市消防は、京成東成田駅地上出口風上側に現場指揮本部を設置
10:38	千葉県警察及び成田市消防は、防護服を着装しB1Fコンコースに前進指揮所を設置
10:38	千葉県警察及び成田市等消防は、レベルA防護服を着装、携帯型化学剤検知器を携帯しB2階ホームへ進入、電車到着後区域設定（ゾーニング）を実施
10:38	NAA消防は、千葉県警察及び成田市消防と協力して地上階車両乗降場付近に救護所を設置
10:38	XYZ社電車東成田駅到着
10:38	東成田駅XYZ社員は、前から1両目及び2両目の乗客の避難誘導にあたる。地上に誘導した乗客に乾的除染（脱衣）の指示にあたる。

時 刻	内 容
10:41	千葉県警察及び成田市等消防は、レベルA防護服を着用したホットゾーンを設定、前から4両目の意識を失った5名の救出にあたる。
10:41	医療関係者地上階車両乗降場到着。医師2名は、防護服を着装しウォームゾーンに進入し一次トリアージにあたる。
10:41	千葉県警察及び成田市等消防は、前から3両目の乗客をB1Fコンコースへ誘導する。同コンコースにおいて、NAA消防の協力を得て、当該乗客に脱衣による乾的除染を指示するとともに、救護所へ誘導する。
10:45	千葉県警察は、床に漏洩した液体をスポンジにより吸着回収するとともに、当該液体を特定するため、サンプリングを行い、専門部署へ搬出する。
	また、成田NBCテロリズム対策研究会も分析を開始する。
10:46	千葉県警察、成田市消防及びNAA消防は、B1Fコンコースにおいて、電車内で意識を失った5名の乾的除染を行い、レスキューシートで覆い、除染テントへ担架搬送する。
10:46	医療関係者及び救急救命士は、救護所付近でトリアージにあたる。
10:47	千葉県警察は、救護所において、無症が確認された前から1両目及び2両目の乗客を一時避難所へ誘導する。
10:48	千葉県警察は、床に漏洩した液体を検知した結果、サリンの反応があつた旨、現場指揮本部へ連絡
	また、成田NBCテロリズム対策研究会も状況観察及び検知器反応等からサリンと推定
10:50	千葉県警察及び成田市等消防は、液体漏洩電車内の除染を実施
10:50	NAA消防は、給水車からホースを延長し、除染テントへ除染用水を供給する。
10:51	NAA消防は、千葉県警察及び成田市消防と協力し、除染テント内において、電車内で意識を失った5名の温水による湿式除染作業実施
10:53	除染終了後、救護所において医師による負傷者の2次トリアージ及び治療活動実施
10:55	成田市等消防及びNAA消防は、重症5名（内2名心肺停止）及び中等症10名を救急車により、想定病院へ搬送
10:56	要請を受けた医療機関は、軽症20名をバスにより、想定病院へ搬送
10:56	要請を受けた医療機関は、無症65名をバスにより、想定ホテルへ搬送
10:56	成田市消防は、電車乗客数及び負傷者搬送状況等の把握に努め、現場指揮本部に報告する。
10:57	千葉県警察及び成田市等消防のレベルA防護服を着用したホットゾーン進入隊員は、自身の湿式除染を実施
11:00	活動終了
11:05	訓練参加者B1Fコンコースへ集合。講評、挨拶実施
11:10	訓練参加者解散

奥村報告 資料④-3

成田国際空港におけるテロ対策合意訓練 訓練会場車両配置図



配置図記載車両以外の訓練参加車両にあつては、訓練車両待機場所A-3駐車場から出動し、訓練車両移動経路図に従い、訓練車両待機場所A-3駐車場へ移動して下さい。

奥村報告 資料⑤

	1日目	2日目	3日目
8時30分～9時	NBC総論 (FIRST RESPONSE)		
9時～10時30分	Chemical座学 Chemical事例検討	除染とPPE実習	机上演習 (NBC3シナリオ)
10時30分～12時			
13時～14時30分	Nuclear座学 Nuclear事例検討	診療実習(医師、看護師) 分析実習(検査技師)	病院前を含めた 関係機関との総合演習
14時30分～16時			
16時～17時30分	Bio座学 Bio事例検討	試験(実技、筆記)	
17時30分～19時			

奥村報告 資料⑥